

おたふくかぜワクチン接種をご希望の方へ

～予防接種に欠かせない情報です。必ずお読みください。～

1. おたふくかぜとその症状

患者のせきやくしゃみなどにより空中に飛び出した、ムンプス（おたふくかぜ）ウイルスを吸い込むことにより感染します。潜伏期間は2～3週間で、軽度の発熱と耳の痛みで始まり、耳の下（耳下腺）のはれが顕著になりますが、その症状は通常5～7日で回復に向かいます。

2. おたふくかぜと合併症

おたふくかぜの合併症としては無菌性髄膜炎、ムンプス難聴、脳炎、睾丸炎（精巣炎）、卵巣炎、膵炎などが報告されています。合併症が起こる頻度は、無菌性髄膜炎（症状としては発熱、頭痛、嘔吐）が10人に1人、ムンプス難聴が1,000人に1人、脳炎（症状としては発熱持続、けいれん、意識障害）が5～6,000人に1人と報告されています。思春期頃におたふくかぜにかかった人のうち、数%の人が睾丸炎（症状としては発熱、睾丸腫脹）を合併しますが、男性不妊の原因となることは極めてまれです。

3. 免疫

おたふくかぜの感染者は小学校低学年や幼稚園の子どもたちに多く見られます。一度おたふくかぜにかかった人が、耳下腺炎を起こす例も再発性耳下腺炎として報告されていますが、ムンプスウイルスの感染によるという確実な証拠はありません。予防接種を受けた人のほとんどに免疫ができます。しかし抗体の低下する症例が報告されており、ワクチンの有効率は90%前後ではないかと考えられます。小さい頃におたふくかぜにかかった場合、特徴的な症状を示さない、いわゆる不顕性感染で終わる例もあります。既に抗体のある人にワクチン接種を実施しても問題はなく、免疫は高められます。

4. ワクチンの効果と副反応

1) おたふくかぜワクチンの効果

おたふくかぜワクチンは弱毒性生ワクチンで、身体の中でワクチンウイルスが増え、抗体ができます。抗体はワクチン接種を受けた90%前後の人にでき、おたふくかぜに対する免疫はワクチン接種2週間からできます。おたふくかぜの潜伏期間にワクチン接種を受けても、特におたふくかぜの症状が重くなることはありません。

2) おたふくかぜワクチン接種後の副反応

おたふくかぜワクチン接種後2～3週頃に、発熱、耳下腺腫れ、嘔吐、咳、鼻汁等の症状があらわれることがあります。これらの症状は通常、数日中に消失します。

接種後3週間後に、発熱、頭痛、嘔吐等の症状が見られる無菌性髄膜炎が数千人に1人程度の頻度、接種後数日から3週間後に紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等が見られる血小板減少性紫斑病が100万人に1人程度の頻度で、また頻度は不明ですが、急性散在性脳脊髄炎や脳炎・脳症があらわれることがあります。まれに難聴、精巣炎があらわれたとの報告があります。

接種後（30分間程度）にショック、アナフィラキシー様症状（蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫）がまれにおこることがあります。

5. 次の方は接種を受けないでください

- ① 明らかに発熱している方（通常は37.5℃を超える場合）
- ② 重い急性疾患にかかっている方
- ③ このワクチンの成分【カナマイシン、エリスロマイシン（抗生物質）等】によりアナフィラキシーをおこしたことがある方
- ④ 医師より免疫不全等の診断を受けた方または免疫抑制をきたす治療を受けている方
- ⑤ 妊娠している方
- ④ その他、医師に接種が不適当な状態であるという診断を受けた方

6. 健康被害救済について

接種による死亡及び障害（1級～3級）などの健康被害が発生した場合は、全国町村会総合賠償補償保険による救済対象となります。

また、接種による死亡、障害（1級、2級）入院を必要とする程度の医療が発生した場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法による「医薬品副作用被害救済制度」に基づく救済対象になります。

※ 発生した健康被害と予防接種との因果関係が認められた場合

7. その他

※ おたふくかぜワクチン接種は任意の予防接種で、助成は町の行政措置として行います。接種については保護者の選択により決定してください。

問合せ先 野木町健康福祉課健康増進係 TEL 57-4171
